

令和元年度 上伊那国語教育研究会秋季研修会 開催

11月28日(木)午後、赤穂南小学校にて、今年度の秋の研修会が開かれました。本研修会では、Aグループで研究を進めてきた文学教材「お手紙」(小学校2年生教材:光村図書)について、同校2年生担任の寺沢愛未先生の授業を参観させていただきました。そして授業研究会の後、山梨大学大学院准教授の茅野政徳先生の講演「子どもたちが自分の思いを伝えながら、豊に想像を広げて読みを深める授業のありかた ～言葉に対する見方・考え方を子どもの姿から～」をお聞きしました。

赤穂南小の研究会外の先生方にも多くご出席いただき、50名近い参加者を得て共に学び合いました。

単元名「お手紙」アーノルド＝ローベル(光村図書)

授業者 寺沢愛未先生

新卒初任者として赤穂南小学校の2年生を担当している寺沢先生の初めての研究授業でした。校外の先生方も参観する中で少しそわそわした様子の子どもたちでしたが、寺沢先生の落ち着いた話し方と、子どもたちの中に入って一人一人と視線を合わせながら話を聞く姿勢から、授業が進むにつれて子どもたちも普段の落ち着きを取り戻していくような様子がありました。この授業は、お手紙の音読発表をした場面



を決めた子どもたちが、グループごとに音読発表の練習をしていく場面でした。この授業までに全員で確認した「音読をする時の工夫の仕方のモデル」を参考に自分の音読の工夫を考えたり、グループ練習で互いの読み方を聞き合う中で感じたことを伝え合ったりして、自分の読みを深めていきました。子どもたちが練習する中で寺沢先生が各グループを周り、子どもたちの音読の工夫の良さや気づきについて共感しながら一人一人が自分の音読の工夫を持てるように支援していました。グループ練習の後には、全体場でいくつかのグループに発表してもらい、同じ場面でも読みが違うことを共有し、次時へ繋げました。

● 授業研究会意見交換

- ・ 中学だと音読劇は普段やらないし、時間がとれない。全体で共有する前と後では読みに違いが出ていたし、声も大きくなった。友だち同士でどこまで気づけるか、気づけない部分を先生がどう扱うかが課題。
- ・ あるグループは1ページを延々と読んでいた。「見ないで読めるよ」と子どもは言っていた。真面目な子どもたち。読みの交流は、気持ちの根拠を聞いているグループもあれば、なかなかできにくいグループもあった。
- ・ 子どもたちに自分たちの読みを全体場で聞いてもらいたい、発表したいという意欲があった。
- ・ 先生が作り出す、ゆったりとした雰囲気がとても良かった。練習のとりかかりは固まっていたが、練習していくうちに声が出てきていた。
- ・ めあてが子どもたちに落ちていないと、この時間何をしたのか分からなくなってしまうかもしれない。
- ・ 「きみが」というセリフを「ちょっと悲しい気持ちで読みたい」と発言した子にもう少し話を聞いてみたかった。
- ・ 子どもがこの教材で「〇〇したい」と思えるようにしていきたい。

● 茅野政徳准教授講評

- ・ 指導方法ばかりに目がいってしまう研究が多い中、Aグループの教材研究の深さに驚かされた。
- ・ 新学習指導要領では、国語科においても「知識および技能」という項目が設けられた。子どもたちが自分の思

いを音読で表現するためには、声の出し方や強弱の付け方など、表現のスキル習得は欠かせない要素の一つ。

- ・子どもたちに様々な音読の工夫を示していた。自分の思いに合った工夫を選び、言葉の響きを楽しみながら音読ができるようになればよい。
- ・気持ちを表す言葉や、学んできたことが模造紙に書かれ、掲示されていた。子どもたちが必要に応じてそれを振り返りながら授業に取り組んでいた。
- ・子どもたちの学習カードや発言から、子ども同士の意見の「ずれ」が随所にあった。「ずれ」が学習を深めるチャンス。

講演会

「子どもたちが自分の思いを伝えながら、豊に想像を広げて読みを深める授業のありかた

～言葉に対する見方・考え方を子どもの姿から～

講師：山梨大学大学院准教授 茅野政徳先生

- 「自分の思いを伝え、豊かに想像を広げて読む」前提として
音読は技能。教えていないのに良い音読にはなっていくにくい。教えることははっきり教える。子どもから引き出せる時には引き出す。使い分けをしっかりとしていきたい。子どもが自由に音読するために、教えることで自由の幅を広げることができる。教えていないことをいきなりできない。
- 文章の内容や形式に着目して読む
言語は、言語形式とそれによって表される言語内容とを併せもっている。
 - ・形式…「題名」「設定」「表現（面白さ）」
 - ・言葉そのもの…「文学ことば」「いらぬことば（普段使わない言葉に着目）」
 - ・「空所・隙間」を読む
- 「前に」が言える子どもを育て、「次に」が言える教師になる 「つなげる」学び
「主体的な学び」の定義の中に「自己の学習活動を振り返って次につなげる」とある。読むことの学習に系統性を見出し、国語科の「知識及び技能」、学び方などを身に付け、次の学習や日常の読書生活に生かす子どもへ。「先生これ前に似ているやつあったよね」「それは次に習うところに出てくるから覚えていてね」
- なぜ「伝えあい」「学びあい」なのか
全国学力状況調査から
学級やグループで課題を設定し、その解決に向けて話し合い、まとめ、表現するなどの学習活動を積極的に行った学校ほど、学力が高い傾向がある。これらのことから、「伝えあい学びあう」ことを充実させることは、児童生徒の学力につながるものと考えられる。→ラーニングピラミッド（外言化→腑に落ちる→理解の定着）
- 「伝えあう」ため、気づきや発見のある授業に
悩み、困り感、枯渇感、切実感のある課題を設定。「分からない」「どうやったらいいの？」→チャンス！
「話したい」「聞いてもらわないと」「書きたい」「読んでもらわないと」と思えるように。そこに「ずれ」が生まれる。「ずれ」を楽しむ。
- 「ずれ」を生み出す4つの学習課題（発問）づくり
1 登場人物の気持ち・心情、理由を問う…王道の発問 ①行動や様子 ②表情 ③会話 ④情景 から考える
2 空所・すき間を「スキーマ」で埋める…スキーマ：行間を補うために使う常識的な知識
既有知識、生活経験、読書経験、家族構成、友だち関係、習い事、地域性等 から考えが出てくる
「お手紙」の空白の4日間 「一つの花」の空白の10年間など
3 自分を語る
4 表現の効果を問う、作者と対話する